ジョージ・オーウェルにおける思想的転回点としてのスペイン市民戦争

宮　井　　敏

スペイン市民戦争は，フランコ将軍のひきいるファシスト政権がスペイン第二共和国の人民戦線政府に対して反政府クーデタをおこした1936年7月から，首都マドリードが陥落して政府軍が最終的に敗れた1939年3月までつづいた内乱である．ジョージ・オーウェルはこれに対して，はじめは報道班員として，ついで義勇軍の民兵として1936年12月末に参加し，1937年6月，前線で負傷してスペインを脱出している．したがってこの間わずかに6カ月の参戦にすぎなかったわけであるが，これが作家としての，またイギリスの gentleman radical[1] の一人としてのオーウェルに与えた影響は深刻であった．正義と自由をファッショと暴力の手から守るという人道主義的な連帯感に支えられた，国際的な規模の知識人達の組織参加が，ファシスト勢力の勝利と，人民戦線内部の分裂によって，無惨にも失敗してしまったという事は，1950年，47歳の短かい生涯を終えるまでの彼の思想傾向を決定的に左右するほどの事件であったわけであり，また彼の後期の二つの問題作，*Animal Farm*(1945)と *Nineteen Eighty-Four* (1949) が書かれる直接の動機ともなっているのである．そこで，このスペイン市民戦争を契機として，オーウェルの基本的な思想がどのように転回して行ったか，そうしてその事がどのような形でこれら二つの代表作に結実して行ったかを，従軍記 *Homage to Catalonia* (1938)[2] と，回想録 *Looking Back on the Spanish War* (1943) を中心としてたしかめてみようというのがこの小論の目的である．

スペイン市民戦争は1930年代のヨーロッパの知識人にとって，一種のリトマス試験紙だったといわれる．それほどに，ヨーロッパ大陸の一角で行なわれたこの内乱は，ファシスト側，人民戦線側のいずれを支持するにせよ，また直接戦場へ行く行かないにかかわらず，およそものを考える事を職業とする人達にとって，いずれにせよ自らの態度をはっきりとさせられるテストの役目をはたしたわけである．イギリスの場合は，とりわけこの時代が pink decade と呼ばれるほどに，いちじるしく左傾していたこともあって，フランコ側に参戦した Roy Campbell や，フランコ支持を明らかにしていた Evelyn Waugh などはむしろ例外として，当然の事乍ら多くの詩人作家達は人民戦線側を支持し，参戦したのであるが，そうしたあまたの進歩派グループの中でも，オーウェルのこの戦いへの参加と離脱のあり方は，いくつかの点できわだった特徴を示しているようにおもわれる．この事は，一つにはいろいろな偶然的要素から，また一つには彼の性格に内包されている傾向によるものであろうが，ともかくそれがあまりにもオーウェル的であった，という事がまず指摘されなければならない．[3]

第一に，彼は「ロンドンのある社会主義団体の週刊機関誌のために」，[4]「記事でも書いて送るつもりで」スペインへやって来たのであるが，「当時のバルセロナの雰囲気では，それ以外のやり方はとても考えられなかった」[5]ので，報道班員としてではなくて民兵としてすぐさま参戦することにでなった，という点である．きわめて倫理感のつよい人によくあるように，オーウェルも生来それほど行動的なタイプの人間ではなかったといわれているが，それにもかかわらず，社会現象に対する彼の反応はするどく直線的であったといえる．war-correspondent から militia へのすばやい切り替えも，従ってその例に洩れるものではなく，丁度スペイン参戦の直前に脱稿した，イギリス北部の炭坑労働者の実態調査であるルポルタージュ，*The Road to Wigan Pier* (1938) 執筆の事情ともよく似通った点が見られるのである．つまり，オーウェルの頭の中には，ほとんど慢性化してい

るといってよいほどのつよい危機意識がたえずひそんでおり，それが「現在」という時点に対する過度の集中となってあらわれる結果，横断的な左右の状況に対する判断も，時間的な前後の推移に対する考慮もなしに，盲目的直線的に，しかもあらゆる矛盾の即時解消を目指して，対象にむかってとびこんで行く，という形になるのである．

だからこそ，それぞれの状況に対応してその時々に自分にとって最も重要だとおもわれる事を躊躇なく実行して行く事が出来たのだともいえようが，今一つ，彼のこうしたはげしいエネルギーを支えていたものとして，彼の心理の底にひそむつよい贖罪意識が考えられる．およそスペイン内乱に参加した詩人作家達の中で，オーウェルほどきびしい罪悪感に悩まされて参戦した人はあるまいといわれている．それは単なる倫理感や，人道主義や，市民的義務感をこえる，オーウェルにのみ固有の，深層心理につながる一つの固定観念であり，いわば素朴に幻滅してしまっただけの Arthur Koestler や，戦火にスリルを求めた Ernest Hemingway などにはとても見られないようなはげしい感情であったといえよう．1930年代の作家はみな政治的関心がつよく，社会参加も活潑であったとはいうけれども，彼等の多くはオーウェルのいう“soft-boiled emancipated middle class”[6]の出身であり，経済恐慌や，Fascism の脅威などとはいっても，およそ観念的な把握でしか理解出来なかった人達であり，ビルマの下級警察官からパリのどん底生活まで体験して来たオーウェルとでは，社会認識の点ではまさに天地のひらきがあったわけである．彼の upper middle class から上のすべての upper classes に対するつよい憎しみと疎外感が，裏返しにされると guilty conscience をともなった階級意識となり，それが Eton School を卒業しながら Oxbridge となるコースを断念させる動機となり，ビルマでは原住民に対する whiteman's burden の意識となり，パリでは最下層の人々に対する偏愛に近い親切感となり，北部炭鉱地帯では労働者に対する憧憬を交えた劣等意識となり，そうして，ここスペイン，バルセロナで

はカタルーニャ人に対する観念的贖罪意識となって現われて来るのである．スペイン内乱は国民の半数が文盲であり，国民の4％で国土の60％を占有しているという，まさに前近代的な後進国における，後進性内部で戦われた市民革命であったが，その点で皮肉にもオーウェルが抱く guilty conscience が丁度満足させられるような条件がそろっていた状態だったのである．

さきにのべたように，オーウェルはこの内乱の勃発におくれることおよそ五カ月，1936年12月に参加しているが，一方，戦いのほうは彼が負傷して脱出した1937年6月からあと，2年近くもつづいて1939年3月に終結している．したがって彼の主観的な熱意にもかかわらず，この革命に対して彼はいわば「遅刻して早退きした」形になっており，その戦場での体験というのも前後およそ六カ月あまり，全体の期間の五分の一にすぎないのである．そのために，すぐれた記録文学である彼の従軍記 *Homage to Catalonia* も，時間的地域的にみると，スペイン内乱全体を包括的に網羅する資料としては当然問題があり[7]，あくまでもイギリスの作家ジョージ・オーウェルの見聞録としてのみ意味をもつものであろうが，もし部分的にせよこの作品が資料的に何らかの価値をもつものとすればそれは，マドリードを中心に活躍した International Brigade（国際旅団）から見た記録ではなくて，バルセロナを中心に戦った POUM（統一労働者マルキシスト党）を通してみた観察であるという点と，そのためにバルセロナでおこった，革命に対する反革命という信じ難いほどに複雑な二重内戦の様相を克明につたえている点の二つにあるものと考えられる．この，海外からの義勇兵の多くが参加した国際旅団ではなくて，地方的な少数派であった POUM に加わった事と，そのためにスペイン内乱の経過の中でも最も事情の錯綜した，二重内戦の中心点であるバルセロナにいた事が，オーウェルの参戦の第三番目の，そして最大の特徴となっているのである．元来スペインという国は歴史的にも風土的にも分立主義的な傾向がつよく，とりわけバル

セロナを中心とするカタルーニャ地方は，東側のバスク地方とならんで，固有の民族語と独特の風俗をもつ旧王国としてほとんど独立した自治体の態をなしていたのである．POUM というのはそうした状況を背景にもつあまたの政治団体の一つであり，オーウェルがこの団体に加入した事が偶然であったかどうかは別問題として[8]，重要な事はこの事によって彼がバルセロナにおける深刻な反革命の目撃者となりえた，という点である．そうしてこの最後の点が戦線離脱後のオーウェルの，いうなれば思想的転回の最大の動機となったと見る事が出来よう．

さて，オーウェルのスペイン参戦が，同じ行動をとった他の知識人達にくらべていくつかの点できわだった特徴を示している事を指摘して来たが，それではこの義勇軍参加という出来事が，作家知識人としてのオーウェルにとって一体どれだけの意味をもっていたものであろうか．彼は自分では「何故義勇軍に参加したかと訊ねられたならば，ファシズムと戦かうために，と答えたであろうし，何のために戦かうのかと聞かれたならば，common decency のために，と答えたであろう[9]」といっている．ここで“decency”といったのは，人間として最低守るべきルールのようなものを意味しているのであろうが，直接的には叛乱軍であるスペイン領モロッコから来たムーア人部隊やスペイン陸軍の蛮行，残虐行為など，間接的にはその背後にある Nazism, Fascism のもつ terrorism, illiberalism などに対して守るべき，自由，正義，democracy, humanism などまでも含めた人間生存の基本的条件を考えていったものと考えられる．そしてこの“common”という形容詞は，その事が共通してみんなで守るべき正義でなければならないという彼のつよい信念を示しており，そこに少くともまだ残っていた人間同志の紐帯感，共通の価値に対する素朴な信仰をはっきりとよみとる事が出来るのである．従って彼の参戦の動機の背後には，ごく素朴な optimistic ですらある人間の誠実さに対する信頼感が，つよい倫理感とともに存在していたのであり，自らもみとめているように，「はじめのこ

ろは戦争の政治的状況については興味もなく」，「その政治的側面については全く無智[10]」であり，この段階では socialist としての社会認識や改革的意図などよりは，犯されようとしている何らかの「価値」を守ろうという防衛意識のほうがよりつよく支配していたのである。そしてこの事が，よし結果論的にみて知識人の「陶酔から幻滅へ」の一過程でしかなかったにもせよ，オーウェルの参戦はこの点でこそ知識人の組織参加の古典的実例となりつつあるのである．

ところが，正義が犯されようとしている危機状況を知性で感じとった知識人が，倫理的判断から一つの「価値」を防衛しようという実践に出た場合，現実の戦いの中に不可避的に存在する政治的側面がつよく浮かび上がって来ると，誠実で倫理的だが全く無力である個人は，政治の力学的なうごきの中でおこる両極化の現象の中で，ほとんど完全に系列化されてしまい，気がついた時には，没個性的な劃一的行動の中で埋没してしまう結果におわる事が多い．基本的な「個」の「全」に対するかかわりの中で，知識人は自分の個性と自由を放棄しない限り，正義感の発現を具体化してゆくことは出来ないというわけである．オーウェルの場合も，最終的にはこの例に洩れるものではないが，彼がいわば「予言者的知性」をもつ知識人であり，ふつうの人よりも個性と自由の埋没を意に介しないばかりでなく，政治と倫理の対決の場に於て，敗北をみとめるにはるかに頑強であった点が些か違っていたのである．結局は同じ事になるのであろうが，知識人の組織的行動への参加における限界と転向という点から見た場合，オーウェルのそれは組織参加の行動線上での転回点が，ふつうのケースよりは数歩ふみ込んだ地点にあった，といえばよいのであろうか．

この数歩にもせよ当初の目的に近づこうとする足どりを動かしたものは，彼の政治的関心や社会意識もさる事ながら，精神構造内部にひそむ一つの執念であったと考えられる．大体，オーウェルのような攻撃的な性格から発する社会的活動の大部分は，「精神的自己保存の傾向としての inferior-

ity complex の補償現象」としてみれば，かなり手際よく説明がつくものである．英米の Orwellian critics が彼の実践活動の積極的な意義を真正面から倫理的にうけとめようとしないで，彼の幼時の生活環境を対象とした精神分析的な解釈や，劣等感の成立過程の解明のみに走りがちな傾向にある事の当否は今さておき[11]，贖罪意識，劣等感，過度の階級意識などの感情が複雑にからみ合って，それが社会的正義感なのか，個人的感情であるのか，ほとんど区別がつかないままに，つよい怒りの原動力となって，おそかれ早かれ結局は戦列からの離脱になってしまう彼の転向をしばらくはひきとめていたのだといえるのではなかろうか．

さて，こうした形でおこった思想的転回を直接オーウェルに決意させたものは，集団行動のもつ非個性的な劃一化に対する嫌悪感や，元来反体制的なこの男が機構や制度に対して抱くつよい不信感などとともに，具体的には official party-line（政党官僚）の示す偏執的な党派性と反知性主義，党派的利害から生れる反倫理性などに対する反撥と憎悪が上げられるが，とりわけ作家としてのオーウェルをもっともつよく刺激したものは，政治的プロパガンダのもつ虚偽と，一切の批判を許さない政党官僚の護教神学的な無謬性の主張であった．一方の側には容謝ない批判と真実の追究という文学本来の基本的な姿勢があり，他方の側には刻々に変化する現象の多様性に対応する現実的な組織行動のもつ力と統制が対置されているという，まさに政治と文学の集中的な接点がここに存在するわけであるが，実際に起った事よりも，起るべき筈だった事に基いて歴史がかかれるのを目撃した時，オーウェルの怒りはまさに頂点に達したのである．どのみち文学というものは政治優先を徹底すれば蒸発してしまう運命にあるものかも知れないが，ある一つの目的，しかもそれが客観的な証明を経ない一つの政治目的のために，矛盾，虚偽，真実の歪曲を座視する事は，作家としてのオーウェルには到底たえがたい事だったのである．

こうしたオーウェルの行動なり，発言に対して，もちろんいろいろな批

判がないわけではない．上にのべた真実を記録し伝達しようという文学者としての良心的な態度はある意味で当然のこととしても，事実の客観的把握という点では果して彼が主観的に熱望したほど正確であったかどうか，些か問題が残るところであろう．ヒュー・トマスもいっているように[12]，個々の戦闘についてのオーウェルの描写にはたしかにすばらしいものがあろうが，内乱の経過推移については，事実認識の上でやや均斉を欠く把握をしている面があるのである．オーウェルのはじめからの意図がファッショ勢力に対する美しいが絶望的な戦いの有様を人類の正義のために書きのこそうというのでもしあるならば，彼は冷静なる観察者としてこそ終始すべきであって，軽卒に民兵となるべきではなかった，という事もいえるわけである．つまり，彼には卑怯者と罵られても，その悪罵に耐えて，全般の情勢を客観的に把握できる立場にわが身を置こうとする真摯な努力に欠けてはいなかったか，という気はするのである．

また，“common decency”のためにファシスト政権と戦かうのは，彼が至上のものと考える一つの「価値」を防衛するための事としてよく理解出来るが，その事と，socialist としての社会改革の意図とが，彼の計画の中でどのような関係に立っていたのであろうか．彼はロンドンでは ILP (Independent Labour Party)（イギリス独立労働党）の一員であり，その関係からスペインでは POUM のメンバーとなった，つまり，れっきとした社会主義者であったのであるが，単なる正義感にあふれた一知識人としての「価値」の防衛のための行動と，socialist としての「社会」の改革のための運動とが，有機的にむすびつかないままに，彼の主観的な情熱の中で，未分化のまま混在していたのではなかろうか．“common decency”を守ってファッショと戦かうのは戦争である．労働者の直接支配を目指して階級なき社会を実現しようというのは革命である．この二つのテーゼの統合と対置について未消化のままに，怒りと感激という sentiment の中にオーウェルは甘く堕してしまっていたのではないだろうか．

さらにまた，Fascism と communism の混同の問題がある．この点について，イギリスの左翼系の批評家は，communism をオーウェルの描いたようなものとは考えず，彼が抽象的な全体主義について語るすべての人々のように，Fascism のいろいろな特徴を communism に帰属させて，しかも Fascism ではなくて communism を中傷しようとしたと批難しているのであるが，私は[13]必ずしもそうは思わない．「個」の「全」に対する基本的なかかわり方に於て，組織的な集団行動のもつ没個性的劃一化が，自由と個性を生命とする独立した知識人に与える印象という点では両者は全く共通しているし，さらにまた，知識人の正義感という倫理と現実処理という政治とを対決的にとらえた場で，政治を人間性に対する加害者として告発しようとする時，[14]両者は同じ被告席に立つ事にもなる筈だからである．まして当時の Stalinist-communists がとった方針なり行動なりを歴史をふまえて考えて見る時，オーウェルが Fascism の諸特徴を Stalinism の中に見出したとしても，むしろそれは当然の事であり，その点について彼が批難される理由は全くない．批難する側の official party-line の無謬性の擁護にかえって問題がある位のものである．問題はその事よりも，現象面からみた両者の諸特徴の類似の指摘だけで事足れりとしないで，socialist としての認識に立って，両者の本質的な相違をオーウェルがどの程度つかんでいたか，という点にあるのである．どうせ政治を動かすような奴等はどれもこれも似たようなものさ，という程度の素朴な政治不信から，彼が何もかも全体主義という名前の下に一括して片附けようとしたのだとするならば，文学者としてすら政治認識が甘すぎるとされても，その点ではいわれなき批難だとは言い返せないのではなかろうか．

或いはカタルーニャ地方の農民労働者の革命的エネルギーがあらゆる矛盾の即時解決を願っていたオーウェルの眼を感激の涙で曇らせたために，すぐ眼の前にいる味方内部の敵であるスターリニスト共産党と，味方全部の共通の敵であるファシストとを「味噌も糞も一緒」にして混同してしま

う結果となったのかも知れないが，それにしても，農民労働者に対して彼が抱く guilty conscience にも些か問題がありはしないか．彼の深層心理の底にわだかまる上流階級に対する深刻な劣等感と憎悪の裏返しが，下層階級によせる親近感と劣等感であると，意地悪く言えば言えるのであって，見様によれば，大へんな思い上がりであるとも，差別意識の変形であるとも見る事が出来るのである．彼が，社会の底辺にある人々に対する充分な認識と共感もなしに空疎で観念的な社会改革論をふりまわす進歩派の人々に対して，彼等がその実践に生活をかけていない事，運動が単なる綺麗事に終っている事，従って社会的正義感というのも結局は主観的な幻想にすぎない事を指摘するのはまことに当を得た事である．けれども同時に，その批判がさきの guilty conscience と同じくあまりにも egocentric で，相手の立場を計算に容れないで発言されると，聞き手は何か間接にしか自分の責任でない事について不当になじられている気分になり，彼の熱っぽい口調だけがむなしく空まわりする結果におわってしまうのである．彼が社会の階級構成をあまりにも固定的に考えていて，階層的可動性について考え及ばなかった事と相まって，この階級意識過敏は大方の批判を免かれないところであろう．

オーウェルは，さきにのべたようにもともとそれほど行動的な人ではなく，倫理的であろうが現実的ではなく，「予言者的知性」にはめぐまれていても，「祭司的知性」には欠けていた点があったと思われる．そしてこの実際的な感覚の欠如が現実の運動の中では，おしなべて，機構，組織，体制，およびそれらを動かすすべての技術的工夫に対する反撥，不信感となり，具体的にいえば，スペインの戦場における相手方ファシスト政権内部の職業的軍隊に対する反撥，人民戦線内部の正統派共産党の官僚的支配に対する不信感となってあらわれて来る．戦闘に関していえばアマチュアである民兵の職業軍人に対する反感や，政治運動に関していえばアマチュアである一般知識人の職業的革命家に対する反撥も含まれているのであろ

うが，そもそもはオーウェルが基本的に，自分が正しいと信じているある「価値」を防衛し宣布するという「価値インテリ」の立場をとっていて，技術的知能を駆使して或る機構の実際的業務を担当して行く「実務インテリ」の立場をとらず，また理解しようともしなかったということが重要な点であろう．

それはそれでよろしいとしよう．そしてまた彼が，近代産業社会が生み出す巨大な官僚的機構に支えられた二十世紀の事務文明の無指向性，無思想性に対してするどく警告したり，そうした機構の内部にあって事務的処理のみに熟達しているテクノクラート，ビューロークラートたちの倫理不在についてきびしく指弾したり，その前途の崩壊を予言したりする立場に立つ事は従って当然の事である．けれども，彼が基本的に近代社会の，ある程度不可避的な前進エネルギーについてどう理解していたかが実は問題なのである．そもそもスペイン内乱は，ヨーロッパの近代国家群の中に孤立的におかれた閉鎖的後進国の後進性内部の矛盾の克服であった筈であるが，オーウェルの姿勢にはややともすると，その後進性からの脱皮というよりはむしろその後進性の醇朴さの礼讃に終始している面が全くなかったとはいえない．劣等感にみちた贖罪意識で，半封建的なスペインの農村社会や，劣悪な労働条件の下の都市労働者の姿を讃美したり，彼等がつくり上げた民兵組織の中に「階級なき小宇宙」[15]を見出して感激したりしていたのがオーウェルの姿ではなかったか．元来分立主義的なスペインでは，さまざまな主張を掲げた政治団体が，それこそ極左から極右まで，スペクトル的に部分的重なりを見せてならんでいたのであるが，とりわけ CNT（労働者全国連合）という団体の政治的機構である FAI（イベリア・アナーキスト連盟）は，あらゆる形の中央集権的官僚主義に反対し，カトリック教会とブルジョワジーに対する仮借なき抗戦を唱えてかなりの勢力を獲得していた．一方 communist の立場は，政治的現実と妥協し乍ら，一歩退いた形で人民戦線連合を結成して，運動を集権的に組織してすすめて行

こうというのであるから，現実の運動の能率的な展開という点では，あるいはこちらの方がすぐれていたかも知れない．問題はそうして集中した権力を誰が握るか，その組織の末端で何がおこるか，という事であって，その点，アナーキスト達，CNT–FAI の連中の特権と不正に対する憎しみの方がはるかに純粋であり，非能率ではあろうが，よりつよく倫理的であったといいうる．事実，内乱の一定時期までは，組織と訓練がものをいう戦場においてすら，CNT–FAI の個々の兵士の勇敢さや情熱が，フランコ側の職業軍人達の訓練を経た戦闘技術にしばしばまさっていたのである．一方オーウェルの立場は POUM（統一労働者マルクシスト党）のそれであり，POUM は Stalinism に反対した分派共産党であったから，communist の正統派からはトロッキストとして疎外されていたのである．それでもともかくマルクス主義政党の一員ではあったのであるから，アナーキストの立場にはかなり懐疑的であり，また逆にアナーキストから見れば，POUM のいわゆる Trotskism が communist の Stalinism より少でしもましなわけではなかったから，POUM と CNT–FAI とでは現実の提携とかかわりなく，その政治認識についてはかなり違っていたのである．それにもかかわらず，オーウェルの立場がしばしばアナーキストのそれと混同される[16]のは，政治上の見解の相違が見落されている以外にも，オーウェルが文学者として体質的に内包している anarchistic な傾向が，CNT–FAI のもつ純粋性，革命的情熱，理想主義に同質的接近を示していたからであろう．“Why I Write”という論文の中で，彼は創作の動機として四つ上げており，その中でも「純粋な美的情熱」が「政治目的」よりもはるかに優先するとのべている．彼の作家としての眼はアナーキスト達の理想主義的な純粋さや，本能的に中央集権的支配を忌避する反体制的な姿勢にひかれ，実践に赴く知識人としては，CNT–FAI の非能率や，非現実的な孤立主義をあやぶんでいた，つまり，論理的帰結に従って行こうとする理性的判断と，体質的に同質のものに惹かれて行く情緒的傾斜との乖

離がみごとにここにみられるのである.

オーウェルを終生支えていたものは，そのたぐいまれなる勇気であった. 以上のべて来たさまざまな批判にもかかわらず，彼が二重内戦内部の深刻な裏切り行為にあって絶望せず，国際的な規模の代理戦争の中に翻弄されて自分を失わず，むしろ頑強に「絶望する事」を拒否し得たのはやはり彼のつよい正義感であり，不動の信念であったといえる. 負傷して戦線を離脱して後の，内乱全体にわたる人民戦線側の惨澹たる総敗北にもかかわらず，彼は同胞に対するより強固な連帯感をあらためて再確認し，human decency に対する信頼感をさらに強める事が出来たとすらいっているのである.

一方，彼が自ら目撃者となった現実の政治の動きの複雑さと，結局は国家的利害に帰着してしまう国際政局の中での大国の非情さと egoism は，彼にこれ以上現実のドラマに立会う事のおろかしさを教えた. 純粋に美的情熱から書かれた初期のいくつかの小説の主題は，彼の社会的関心の拡大にともなって次第に展開してゆき，彼のいう「政治目的」がつよく浮かび上がって来る1936年以後は，その目的に沿うべく，ルポルタージュ文学に専らエネルギーを集中して来たのであるが，今，史上類のない複雑な国際的代理戦争と，人民戦線神話の崩壊という凄惨な局面を経験した後では，現実はもはや記録文学では到底伝え得ぬ程複雑であり，通常のリアリズムの手法では到底把握し得ぬ程巨大である事を痛感したのであった. 戦後彼がとり組もうとした主題は全体主義のもたらす恐怖とそれによる人間性の破壊であり，全体主義政治のもつ虚偽の告発であった. そして，こうしたテーマの表現手段としては，さきにのべたように，さまざまな現実の出来事を小説の中でリアルに再現して主題の証明に役立てるというやり方よりは，恐怖，虚偽，非人間化という現象を想像力によって創造し，それにアクセントをつけ，caricaturize する事によって，つまり，寓話，諷刺，反ユートピア，未来小説などの手法を駆使する事によってよりよく表現しう

ると考えたのである．*Animal Farm* と *Nineteen Eighty-Four* はかくして生れたわけである．[17]

知識人の組織参加とか，正義のための戦いだとかいっても，結局は異邦人として「出入り自由の国」で些か社会的実践を試みただけのことかも知れない．オーウェルは脱出すればすんだであろうが，内乱終結後大規模な報復裁判が行なわれ，以来丁度30年，今なおスペインの人々はフランコ政府の圧政に苦しんでいるのだから．また高い政治認識といっても，詮じつめれば現実分析の甘さの底にかなり conservative な側面すらあったものと思われるのである．政治的転向に際して，裏切られた怒りがあるために，倫理的負い目を感じなくてすんだ事は彼の幸運だとしても，歴史的感覚に乏しく，extremist で，危機的状況における一揆主義だけが背骨を支えていた，ともいえる人物であった．

だが，それにもかかわらず，敗北にあたってなお絶望せず，幻滅を拒否し，知識人としての孤独に耐えて，最終的には「政治」を揚棄することによって，文学者としての integrity を再確認したオーウェルの勇気は，すべての対決的状況にある知識人をながく激励しつづけることであろう．

注

1. "Orwell is a writer in a well-known tradition in England, that of the gentleman radical." G. S. Fraser, *The Modern Writer and his World* (Tokyo: Kenkyu-sha, 1951), p. 191.
2. George Orwell, *Homage to Catalonia* (London: Secker & Warburg, 1954)
   この作品に対する日本語訳は次のごとくさまざまであったが，最近最後のものに定着したようである．
   「カタロニアへの敬意」，平野敬一，学苑．No. 175, 1955, Apr.
   「カタローニア讃」，Hopkins，平野訳，研究社「英文学ハンドブック No. 23」，p. 29. 1956, Oct.
   「カタロニアへの誓い」，飯沼馨，英語研究 Vol. 46, No. 5, 1957, May.
   「カタロニア頌」，小野協一，英語青年 Vol. CV, No. 1. 1959, Jan.
   「カタロニアに捧げる忠誠」，岩田勝次　大阪府立大，英米文学研究と鑑賞 No.

7, 1960, Mar.

「カタロニア頌詩」, 荒正人, 英米文学講座, Vol. 12, p. 276, 1960, Sept.

「カタロニア讃歌」, 橋口稔訳. 世界ノンフィクション全集, Vol. 37. 1962, Dec.

「カタロニアへの忠順の辞」S. Spender, "創造的要素" 深瀬・村上訳, 筑摩書房 p. 206. 1965, Feb.

「カタロニアへの讃歌」, 清水幾太郎, "現代思想" 岩波全書 No. 266, 1966, Apr.

「カタロニア讃歌」, 鈴木(隆)・山内訳, 現代思想社, 1966, Apr.

「カタロニア讃歌」, 鈴木建三, 季刊世界文学, No. 4. 1966. Aug.

3. "... in fact, the central stream of English literature was more or less directly under Communist control." George Orwell, *England your England* (London: Secker & Warburg, 1954), p. 121.
4. "Orwell's ostensible reason for going to Spain ... was to report the war for a London socialist weekly." Richard Rees: *George Orwell*, (London: Secker & Warburg, 1961), 62.
5. Orwell, *op. cit.*
6. Orwell, *England, you England*, p. 125.
7. ヒュー・トマス, 都築訳「スペイン市民戦争」(東京, みすず書房, 1963) Vol. II p. 97 欄外註
8 オーウェルの POUM 加入は全くの偶然によるものだとするのが定説であり, それはオーウェル自身の記述 ("I had only joined the POUM militia rather than any other because I happened to arrive in Barcelona with I. L. P. papers." *Homage to Catalonia*, p. 48.) を根拠としているのであろうが, 彼自身の言葉にもかかわらず, ILP と POUM の友党関係 ("... a Congress of the POUM and its brother parties—English ILP and German SAP ...," *ibid*,. p. 173) や, ILP 代表がスペイン戦線に常駐し (*ibid*., p. 231), その分遣隊と行動を共にしていた (ibid., p. 38) 事などを考え合せると, POUM 以外にオーウェルが加盟しえた団体は他にはなかったようにも考えられる.
9. Orwell, *Homage to Catalonia* p. 48.
10. *Ibid*., p. 50.
11. Irving Howe, *Politics and The Novel* (London: Horizon, 1957) Chapt. 7.
12. 註7参照
13. 飯沼馨編「作家と政治」(東京, 研究社, 昭和三三年) 第十章
14. Cf. Hans Magnus Enzensberger, 野村修訳「政治と犯罪」(東京, 晶文社,

昭和四一年)

15. Orwell, *op. cit.*, p. 113. "... the Spanish militias, while they lasted, were a sort of microcosm of a classless society."

16. (1) "... he was a soldier with the anarchist troops ...," S. Spender, *The Creative Elements* (London: Hamilton, 1953), p. 130. 「…彼がカタロニア戦線に加わった無政府主義派の軍隊の一兵隊であった事や…」スペンダー, 深瀬・村上訳「創造的要素」(東京, 筑摩書房, 昭和四〇年) 206頁

(2)「彼の加わったのは ... POUM として知られたある小さなアナキストたちのグループだった.」飯沼編, 前掲書, 234頁

17. 従って, 以上の議論をふまえて考えてみると "technically, the book 〔*Nineteen Eighty-Four*〕 shows little imagination. The war of 1984 is fought with the weapons of 1911, rockets and tommy-guns ..." という Tom Hopkinson の批難(Tom Hopkinson, *George Orwell* [Writers and their Work, No. 39], p. 35) は必ずしも当っていない. オーウェルは主題の必要な展開のために dystopia (inverted utopia)という形式をえらんだのであって, Science Fiction を書こうとしたのではない.